

三重大学 人文学部

法律経済学科

特殊
講義

「協同組合論」



日笠 博幸 / 生活協同組合コープみえ 伊賀地域統括部長
大田 卓 / みえ医療福祉生活協同組合 組合員活動部

シンポジウム「安心して暮らせる地域づくりと生協」

1、コープみえ伊賀地域 組合員の活動

2、みえ医療福祉生協 高茶屋診療所の取り組みから

第13回（1月16日）：受講名（受講生29名・聴講&スタッフ26名）

【講義の主なポイント】

1、コープみえ伊賀地域 組合員の活動

- ・伊賀地域の世帯数は66,078世帯であり、コープみえには20,801世帯が加入している。この地域は、2025年に高齢化率が35%を超える予想となっており、孤立や孤独死などが懸念されている。
- ・組合員が生協の活動に参加する形の一つに、組合員の関心に基づく活動への参加がある。組合員が自らの問題意識に基づいて自主的に仲間を集めて活動することや、環境保全や子育てなど社会的なテーマへの活動の参加もある。
- ・組合員の活動は、組合員の自主的なものであることが前提であるが、暮らしをよくしていくためには、生協内だけでなく、地域の方々や他団体と一緒にすすめていくことが大事である。
- ・組合員組織「伊賀エリア会」は、組合員が中心になって活動を検討し、地域での居場所となるようコープカフェ「茶楽」を開催している。また、地域からの要請に応じて消費者被害の防止をテーマにペープサート（人形劇）をおこなっている。「ペープサート」の動画を見ていただきたい。

2、みえ医療福祉生協 高茶屋診療所の取り組みから

- ・事業・活動の特徴に、ヘルスプロモーションと、組合員参加による民主的運営、地域住民を健康づくりの主体に、無差別・平等の医療の実践がある。組合員が自分たちの願いや想いを実現するために主体となって活動している。
- ・医療や介護の場は事業所ではなく暮らしそのものである。事業と活動は市民参加のまちづくりである。
- ・高茶屋診療所を紹介する。1975年に開所、2016年にリニューアルした。リニューアルに必要な出資金4000万円は組合員が集めた。
- ・診療所には組合員の声からコミュニティホールを併設した。ここでは診療所を中心とした地域のコミュニティづくりがすすめられている。そこには、病気になるって受診するのではない診療所の姿がある。
- ・高茶屋診療所の医師と事務長、組合員の声を動画で見ていただきたい。

第13回講義…受講生の感想レポート（一部抜粋）

Aさん（2年生）

実際に組合員の方々の声や活動の映像を見て、組合員の人にとって生協の場は、元氣の出る場所であり、生活の中で欠かせない存在であるのだなと思いました。生協はその地域とほろっとは離せない存在であるので、組合員の人々が暮らしやすい生活をおくるためには地域の人々と協力して、地域全体を良くしていくような活動を進める必要があるのだなと感じました。また一つの事業においてもたくさんの組合員の方々の努力が気持ちがあって実現している。そして実現した場でさらに組合員の方々の繋がりが広がって、もっと地域が暮らしやすいものにするために協力するという流れがあるので、より良いものと広がっていくのだなと感じました。今回の映像や、お話を聞いて、組合員の方は自分が想像していたよりも生協の場を楽しんでいて、大切に思っているのだなと思いました。

Bさん（2年生）

生活協同組合は組合員の自主的な参加、組合員の声をしっかりと聞き入れることがとても大切であることが分かった。どんな分野に携わった生協でもこの根本は変わらないと思いました。少子高齢化が急速に進行し、都市化や地方の過疎化により、周囲の人とのつながりがうすくなってきた今の時代、組合員が安心して暮らせる地域をつくるためにはやはり人と人との“輪”が必要であり、組合員同士が助け合う地域づくりが重要視されることは必然であると感じました。しかしこういった生協がこれから何十年と続く組織にしていけるためには若者の参加も必要なのではないかと疑問に思いました。高齢者から若者まで幅広い組合員の加入、活動への参加により、地域もよりよくなり暮らしがやり成さしていくだろうと思いました。そして安心して暮らせる地域が増えれば、安心して暮らせる社会がうまれてくるのではないかと感じました。

Cさん(2年生)

協同組合がその地域の中で役割を果たす力を持ち、その役割を任せられる存在になることができれば、行政よりも協同組合の方が適している仕事があると思うし、行政には行政にしかできないことがあると思うので、これを「力が強みを活かしてその地域を良くしていくことができる」と感じた。

「病院に必要とされているのは…」というよりはむしろ理想的なことではあるけれど、病院側の一般的な医療事業者としては予防への取り組みが十分な余裕はないと思うので、自分たちの安心した暮らしを自分たちでつくるという意味でも協同組合らしいを活かせる取り組みであると感じた。

自分たちに関することは他人任せであまり、自分自身で準備ができていないことが日本人の悪いところだと思うので、自らも自らの地域を良くしていくという活動をするというところは、理想的な地域社会のありかどを考えた。

Dさん(2年生)

協同組合と株式会社の違いの1つとして株式会社は所有と経営の分離があるのに対して、協同組合は組織者と運営者が同一人であるというのがあります。地元に住む人々が組織して運営しているからこそ、地域のための活動を多く行っているのかなと改めて感じました。

今日の講義では動画で示された地域のための活動の様子を見ることで良かったです。

とくに印象深かったのが組合員で組織する「エリア会」です。協同組合はあくまで組合員のためのもので、組合員が地域に意識を向けなければ、協同組合の力だけでは使えません。だからこそ組合員が自発的、自覚的に参加して地域のための活動を行うことは地域にとって本当に良いことだと感じました。

Eさん (3年生)

生協が好き、安心感、楽しい、勉強になるという思いと胸に組合さんは活動されている。また、〇〇の奥様と認識されるのではなく、1人の人間として、誰かの役に立つ、自分自身が認められているというのが、嬉しいという言葉が私自身の胸に響きました。

伊賀における生協への加入率が31.5%で、約3軒に1軒が組合であり、自分の感覚では、多いな~と感じました。元気の活動と組織の活動の担い手、また、活動のリーダー。さらには、元気の活動へとサイクルする仕組みが共通課題とありと分かりました。ユークラフト「茶米」や消費被害者防止啓発「ポップサト」などの居場所づくりなどを行い「つながり」が広がっている活動が興味深いものでした。私が住んでいる地域でも、このような活動があるのか、調べてみたいと思います。イナジでは、トラックで高齢者世帯や育児などでお買い物に行きづらい世帯に、配達をしている場面が思い浮かびます。生協が非営利団体と認識されていない場合もありました。大田さんのお仕事は、移動して「人」に会うことで、車輪などのお仕事だけでは価値を生まない役割を担うことになってしまっています。安心して住み続けられる町を作るために(ヒト・カネ・要望)を集め、地域のニーズに対して、活動している。高茶屋診療所は、来たときより元気になって帰ることをできるという組合さんの生の声が集まってきたと思いました。30代の組合さんの数が年々減ってきている現状をみて、逆にこの世代の利用者さんの増える取り組みは、何なのかと考えることは、一番の課題であり、達成できれば有意義なものになると再確認しました。

Fさん (3年生)

組合員さんの話を聞いて、一番は「生協が好き」という気持ちから成り立っていると感じました。生協という場を通じて、自分自身の成長であったり、1人の人間として誰かの役に立っているという実感を持つという声も、身近に聞けてよかったです。「ただの主婦であらう」とおっしゃっていましたが、子どもがある程度自立したり、また、子どもがいなくなると家庭等は、旦那さんよりの生活になってきてしまうと思います。「自分として、自分の人生を生きる」ということが、楽しく生きていく上で大切なことだと思います。そういう点で、生協の地域とのつながり、居場所づくり活動は、人が生きていく上で欠かせないものだと思いました。